

娘の結婚

～既婚の娘を持つ在日韓国・朝鮮人女性の語りから～

橋本 みゆき

(立教大学大学院
社会学研究科 博士後期課程)

1. 問題の所在

母親である在日韓国・朝鮮人女性について語るとき、「在日韓国・朝鮮人の母」というカテゴリーの独特のイメージがある。このイメージを仮に「オモニ」（韓国・朝鮮語で「お母さん」）モデルとすると、それは、「荒れるアボジ（お父さん）」に対する「耐えるオモニ」であったり、家族のために身を捧げる「偉大なるオモニ」であったり [朴和美2000: 17; 22]、朝鮮学校運営に情熱的に協力する「オモニ会」の成員 [ウリハッキョをつづる会2001] といった、家父長に抑圧されつつもたくましく家族を支える在日韓国・朝鮮人母親像を想起させる。しかし、「在日韓国・朝鮮人の母」である人を、どのような形であれ、確固として一貫した「オモニ」アイデンティティによって想定できるのだろうか。一律の「オモニ」モデルを、各個人がただ自動的に内面化し再生産するとは、どうも考えにくい。個別の経験を経て自分なりに母を構築し実践する、一生活者としての固有な過程はどのようなものであるのか。これまでも在日韓国・朝鮮人母を描いた文学は多いけれども、母の位置という視点から書かれた文献や研究は少ないのが現状である。

在日韓国・朝鮮人の配偶者選択について、語りのジェンダー差という議論がある。男性が「長子相続」の規範的抑圧を受ける一方、女性は民族文化の継承に積極的であり、結果として女性自身が「女性に対する抑圧」状況の再生産する、というものである [大東2002]。そこでは、4つの親族における複数名の語りから、在日韓国・朝鮮人の一枚岩的でない結婚観を、性と世代という2つの軸に基づいて描き出すのに成功している。けれども同時に、語り手の性別および世代によって、観察者がカテゴリーを本質化している部分も否めない。またそこでのジェンダーとは、二分法的性別の言い換えにとどまっている。ジェンダーの視点から何らかの現実を捉えようとするなら、性別ごとの語りの特徴を挙げるだけでなく、

その語りが生み出された背景を明らかにする必要があるだろう。

そこで本稿では、母という位置に注目して、「在日韓国・朝鮮人の女性」における一つのリアリティに迫りたい。母という位置については、次のように考えてみる。①家族内位置として。物理的には、子供がいるから母の位置がある。それが家族役割という話になると、女性は結婚によって妻となり嫁となり、続いて母として生きるのを期待されることが問題になる。男性中心的な労働市場の構造と、核家族での子供の社会化における表出的役割期待 [Parsons & Bales 1955;1956=2001]、そして母性イデオロギーの規範 [船橋1992] により、家事・育児労働は、後から母親に割り当てられる。母の位置と母的労働は本来、別物である。②彼女自身のライフステージとして。母の位置を生きるのは、子供を産み育てる期間だけではなく、子供の成長後も、異なる社会的位置にありながら長い時間を子供と並行して生きる。しかしまた彼女は、母としてだけ生きるわけではない。一人の女性が母の位置をどう生きるか、つまり子供とどう関わるかは、彼女の（意識的な／不本意な）選択によるものである。その折々の選択は、社会的制約を多分に受けたものであると同時に、彼女なりの解釈と判断を経たものと言える。

具体的には、一人の在日韓国・朝鮮人女性Fさん（仮名。調査時点で58歳）の、彼女なりの「在日韓国・朝鮮人の母」構築の過程を、娘の結婚をめぐる語りを通して見ていく。意識の揺れや多面性を抱えながら語った、彼女個人の固有な経験と解釈をたどってゆき、その背後にある社会的諸条件の作用を検討する。Fさんの事例を取り上げる理由は、その娘Fdさんの、結婚をはじめ人生のいくつかの選択場面において、Fさん自身の人生との相互関係が強く感じられたからである。娘の結婚について母が語る時、その娘が同じ女性であることで、自らの結婚経験を参照する、という状況を考えてみたい。

以下では、まず、在日韓国・朝鮮人女性Fさんの生活史を概観して彼女の社会的位置を押さえた後、娘の結婚をめぐるFさんの語りを紹介する。次に、その語りを生み出した、Fさんのそれまでの経験とその過程で培われた、固有な「生活の論理」 [桜井1996] を探る。その上で、在日韓国・朝鮮人で母であるという位置がFさんの論理形成において持った意味、そして、在日韓国・朝鮮人母の位置と娘の結婚との関係を検討する。

2. 娘の結婚をめぐる語り

(1) 聞き取り調査について

筆者は、若い世代の在日韓国・朝鮮人既婚者とその配偶者およびそれぞれの親

を対象に、「在日韓国・朝鮮人の配偶者選択」というテーマで聞き取り調査を行っている。2002年3月にF dさん（Fさんの長女）の、同年7月にFさんのご協力を得た。以下で用いるインタビュー・データは、Fさんと聞き手の応答の録音を起こしたものである。娘についての語りという外形を必ずしもとっていないが、彼女が「母の位置」にいることを前提にしてのインタビューである。なお、聞き手（筆者）は*で表した。

(2) 語り手の位置

Fさんは1944年生まれで、10歳のとき韓国慶尚南道から関東の朝鮮人集住地域へ移り住んだ。渡日後は、苦勞しながらも団結して生活する朝鮮人たちに囲まれて成長する。商業を営む父もまた、総連や朝鮮学校への寄付を惜しまなかった。Fさんは、家業のために地域の女子商業学校に日本名で就学するが、卒業後は総連傘下の金融機関（朝銀）に就職した。そして23歳のとき、「普通の経緯で」職場結婚して退職し、関西にある夫の実家で暮らすことになる。妊娠するまでの間、義母に「まだ子供できないの」と再三言われたが、結局は二男一女をもうけた。

同居は長かったものの、Fさんは義母に理解してもらえることはなかった。一世の義母は苦勞して財産を築いてきた人であり、親たちのおかげでわりあい楽に生活してきたFさんとは考え方が違うようだった。夫は、初めは母親と妻の間をとりなそうとしてくれたが、いつしか関与を避けるようになる。婚家は不動産を所有していたため経済的には余裕があったが、嫁ぎ先の地で友達もなかったFさんには、助けてくれる人がいなかった。

そうした緊張から解放されたくて、Fさんは外に出るようになる。一番の楽しみは、子供の習い事について外出することだった。「子供は財産だと思ってた」Fさんは、子供の教育に関してだけは自分の意志を貫いて譲らなかった。「言葉と歴史は絶対にわからないとダメ」だと思ったので、朝鮮学校には「ごく自然に」就学させる一方で、子供が1人1つずつ自分で選んだ習い事をさせて、大学は子供自身が「やりたい」ことを重視して選ばせた。朝鮮大学校に進学させないことで周囲の在日韓国・朝鮮人からの批判を受けたが、それでも貫いた。子供たちはそれぞれ、日本の希望通りの「いい大学」に入学し、専門を生かした形で、民族名のまま就職した。そのことが、Fさんの一番の誇りである。子供たちには、もとは朝鮮人であるから朝鮮籍あるいは韓国籍を持っていてほしい。自分自身も、たとえ日本国籍である方が便利だとしても、帰化を考えたことはない。それは、最初からFさんは「朝鮮人大好き」で、イヤだと思ったことはないから、と言う。

子供の結婚に関しては、「なるべくだったら同じ国の人と結婚してほしいな」と思ってきたけども、強制したこともないし絶対というわけでもない。娘のF d

さんは、1996年に同じ業種の在日韓国・朝鮮人男性と25歳で結婚した。聞き取り時点でFさんは、夫とは別居し、飲食店で働いて生計を立てていた。

Fさんは、民族学校および総連関係の社会との関わりの中で生活してきた。このように民族組織と密接な関係を持つ人は、今日では、在日韓国・朝鮮人の中でも少数派に属する。とは言え、戦後、民族組織が高い支持を得ていたこと[金1997: 第Ⅱ部]からすれば、もともとは珍しい存在ではなく、Fさんはいわば従来型「オモニ」の典型的な位置にいると言える。その中で、同胞の批判を浴びながらも、子供に対する自分の教育方針を貫いたことは注目される。そこに、彼女なりの「生活の論理」のようなものが垣間見える。1つ注意を要するのは、娘のF dさんが実際に高学歴専門職を達成したことである。誰の目にも成功と映るF dさんの学業達成・職業達成があるからこそ可能になった、Fさんの現在の語りもあるだろう。そうしたFさん固有の文脈は等閑視できないが、「在日韓国・朝鮮人の母」の位置にこだわってみることで、彼女が「在日韓国・朝鮮人の母」を構築した過程と、その語りを可能にした彼女固有の「論理」が浮き彫りになるだろう。次は、具体的な語りから、Fさんの生活の論理に迫ってみたい。

(3) 職業と子供の重視—「女の仕事」の論理

娘の結婚をめぐるFさんの語りの中で、Fさんにとって特に重要だったと思われるのは、娘F dさんの職業的地位の獲得・維持と子供を持つことである。

F dさんの結婚に対して、何か希望することがあったか、という問いに、Fさんはまず、相手の男性が10歳以上年上であることで「大丈夫かな」と思った、とした。しかし、Fさんにはほかに最も気になることがあった。

F：私、一番嫌だったのは、反対したんだけど、仕事。まだ25歳のときに（F dは）結婚したのね。「今からちょうど仕事を覚えるのに。もうちょっと後にしてほしい」って。自分の人生、これからもっともっと長いのに、仕事もまだ入り口に入ったばかりで。その点で、もうちょっと後にしてほしかった。それから年の差とか、を考えたけど。それで、彼に条件出したのね。「ちゃんと仕事は、一生させてあげてください。そうでなかったら反対です」って。

*：ほんとですかー。

F：それはだって、彼女の人生で一番大切なことだと思った。仕事がなくなったら。私が、男と女関係なしで、一生の仕事持っていてほしいと思って、いるから。教育の一環として、あなたに対して、そういう教育をしてきたから。結婚に際してそういう、仕事を辞めるとか、そういうのは絶対反対

だったの。(その条件があるからF dの夫は)今でも協力してくれているし。洗濯、料理だけは彼女がするらしいけど、掃除とかは全部、彼の方が。分担してやってみたいだから。

一生の仕事を持つことと並んで、FさんがF dさんに結婚する前から熱心に奨めたのは、子供を産むことである。

F：私はね、F dにいつも言ってる。若い頃から言ってたことがあるんだけど。「女は、男の人にはできない一番大事な仕事、子供ね。男の人には産めないけど女の人には産めるからね、結婚しなくてもいいからね、子供は作りなさい」って、() 言っちゃったことあるの。

*：そうなんですか。

F：ほかのお母さんに、すっごく非難されたけど。でも、私はそれでいいと思ってる。結婚して、愛情のない人の子供はいらないと思ってるし(笑)。子供は、だから、愛してる人の子供だったら余計いいけども。私は、「女として生まれたからには、子供は一人くらいは産みなさい」とは言ってるけども。

ここで注目したいのは、出産を女の「一番大事な仕事」だと言う、Fさんの語りである。仕事といっても、家事も仕事もといういわゆる新たな性別役割分業とは別の話である。出産を女性の役割でなく特権として積極的に捉え、また、娘の職業を結婚に左右されないものと位置づける点において。娘のF dさんへの聞き取りの際、現にF dさんは、結婚後も仕事の成果を上げる一方で、仕事と出産の両立を考えあぐねているところであった。Fさんの上のような働きかけが、強く影響を与えているように思われた。

在日韓国・朝鮮人集団の言説において、同胞結婚の奨励はしばしば在日韓国・朝鮮人社会の維持という目標と結び付けて語られる〔例えば、民団新聞2002.10.16; 朝鮮新報2002.10.21〕。その文脈だと、歓迎される出産とは、在日韓国・朝鮮人集団成員を再生産する、在日韓国・朝鮮人男性の姓を受け継ぐ嫡出子の出生である。仕事を理由に同胞男性との結婚に反対したり、結婚しなくてもいいとするFさんの語りは、在日韓国・朝鮮人集団の再生産目標とは折り合わない。女性を職業・出産という自分の仕事を果たす個人として捉える、これをFさん自身の論理といえるなら、それはいかにして形成されたのか。Fさんが実践する「朝鮮人」の「母」が、「オモニ」モデルとずれる過程に分け入ってみる。

3. 在日韓国・朝鮮人の母の位置における経験と論理形成

(1) 女性の視点

初めに、女性という視点からの語りとその背景を見てゆく。娘が同じ女性であることで、他の子供たちに対するのとは異なると思われる語りがある。また、Fさんは結婚後も在日韓国・朝鮮人に囲まれて過ごした。したがって女性の視点と言っても、在日韓国・朝鮮人集団の中の女性という要素が強い。ここでは、女性の視点から見た、男社会／女性同士の社会という関係の軸から考えてみる。

まず、男社会との関係で現れた語りから考える。Fさんは結婚後、夫の親きょうだいで同居した。そこでは、経済力と自己決定力の相関を実感することになる。

F：(前略)今のところ、男社会だったんですよ、自分の経験でね。子供を、結婚して子供を産んだ時にね、自分の責任においてどのくらいまでできるかっていうと、やっぱり経済力がないとできないっていうのを、すごい痛感したの。結婚してから。

(略)

(息子も2人いたけども)女の子は特に、職を持って欲しかった。(中略)「絶対、一つでいいから、自分のやりたいこと見つけなさい」ってことで、手に職を。男の子はね、妻子持ったら自分の責任で、男の社会だからどんなふうにでもやるんだけど、女の子だから、小さい時からそういう道、段階踏ませないと、いざ卒業しても出ていけないって、あると思ったのね。

婚家の不動産収入のおかげで経済的には苦しくはなかったが、経済力への欲求は、家計上の必要に動機づけられるとは限らない。家族内外の「男社会」において、自らの無力感の原因は経済的勢力の弱さにある。そこでFさんが向かったのは、職業をもつ女性に娘を導くことであった。

Fさん自身も、40歳ごろから働き始めた。精神的に楽になるためである。

*：生活はできる。主婦ってことで。外に働きに出られることもなかったんですか？

F：うん、ずっと子供3人育てて。(義母と自分)女2人、炊事場立って、何もやることないでしょ。私、楽になりたいから、外、出ただけど。

嫁いで10年ほどした頃に一度、義母と「対決」した。Fさんが外に出るようになったのはこの後である。それまでの、特に何をやるわけでもないが「黙って(義

母の)言う通りに」する生活に、疲れてしまったという。長男男性との結婚により、妻であると同時に嫁としての位置についたが、それは居心地のいいものではなかった。女性同士の関係でも葛藤がある。Fさんにとって、婚家での嫁として固定された位置との比較において、就労は「楽」になる機会を保障し、子供の教育に関与することは「楽しいこと」であった。子供の習い事は、母として外出する正当な機会となりえた。

一方でFさんは、「男社会」であつても男性には果たせない、女性に特権的な「一番大事な仕事」があると見ていた。出産である。

*：(「女として生まれたからには子供を産みなさい」とFdさんに言う理由、)それはなんでですか？女としてっていうか、人間の仕事として？

F：それはね、私もいっぱい悩んでることがあるんだけど。私、この世の中に生まれてきて、私、世の中の何の役に立ってるんだろうって考えた時にね、何もしてないのね、今。って思った。(中略)ずっと悩んでた。(中略)(ある時)弟が言ったの。「お姉ちゃん。生まれてきて、子供を産んだ。それだけでね、自分の仕事果たしてるから、そんなこと考えなくていい。子供が、次の世の中、次の主人公で、ちゃんとモノを作り出していくんだから、そんな悩むことないよ」って。私、それでね、「ああ、そうなんだ。これでも私、生きててもいいんだ」って。

(略)

私は、若い頃から子供がそばにいてもあやしたことはないし、そんなの興味なかったんだけど。でも、我が子を産んだらほんとにかわいかったし。

(中略)ほかのことはどんな状況でも味わえるけど、子供を産んで、母親の母性愛を感じてほしいなって、そういうのはある。(中略)「35歳までに1人産んでね」って言ってるの(笑い)。

Fさんは、自分が経験した生物学的母の快感あるいは「仕事」の達成感を味わせたいために、Fdさんに出産を奨める。自身が出産のプレッシャーを強くかけられた経験に照らして、強制的には「求めない」という。自らが母役割を担って娘を社会化したり、娘に母役割の再生産を教え込むのではない。在日韓国・朝鮮人集団成員の再生産を課すのでもない。むしろ、母の位置とセットで押し付けられがちな性役割には距離を保っている。

「男社会」でも男性に左右されず、母役割に収斂しない形で女性の生物学的特権を行使するような、女性の生き方を娘に準備する。母という位置を、民族や家族のためというよりも自分の論理に読み替えて利用し、自分なりの母を生きるさ

まがうかがえる。

(2) 在日韓国・朝鮮人の視点

次は、朝鮮民族あるいはエスニック・マイノリティという視点によると思われる語りを見ていく。前節では女性の視点ということで、娘に特化した語りを多く取り上げたが、本節では子供全体にかかる語りとなる。ここではさしあたり、在日韓国・朝鮮人の位置の視点から見た日本社会／在日同胞社会という2つの軸を立てて考えてみる。

初めに日本社会との関係から見る。Fさんの子供たちは、勉強好きで学業成績も優秀であったが、就職活動のときに初めて「ああ、朝鮮人で、これだけではできない」という壁を感じたという。それまでは民族名で通してきただけに、ショックは大きかった。

F：パチンコ屋さんとか金融業者やってる人は、（自分で資金を）貯めてできるけど、大学卒業して自分がやりたいっていうときに、受け皿がない。ほんとに心配したんで、どうしようかって。F dも、就職どこにできるのかなあって。なんかね、すごい運が強かったのか、バブルがはじけた後でね、困難の時にあそこ入れたから。心配したのはそんなもんかな。受け皿がなくてどうすんだらうって。

*：それまでは全然、国籍とかいうものは意識しないで、実力（でいけたのに）……

F：だから私、2番目 [[F dの次兄。日本の国立大学卒]] に言ったの。「いくらいい大学出たってダメよ。国籍、韓国に変えなさい」って言ったの。

紆余曲折はあったが結果的に3人とも民族名のまま就職し、F dさんも日本の大手企業に専門職で採用された。Fさんには、日本の中等教育を受けていた頃に日本名を使っていた経験がある。Fさんにとって、子供たちの本名就職はこの上ない喜びだった。

F：みんな、日本にいたら、日本名になることが（当たり前になって、民族名は）ちょっとでも隠すっていう習慣があるけども。私は、自分の子供を全部、そのままの本名で就職も全部してるから、絶対私はそれを誇りに思ってるし、一番自慢できることだから。（子供たちはよく）頑張ってる。

名前をめぐる差別忌避／本名使用のストーリーはいずれも、日本社会における在日韓国・朝鮮人のマイノリティ的位置ゆえの、差別 - 被差別の枠組みに基づく語りと言える。しかし在日韓国・朝鮮人社会との関係で見ると、この枠には収まらない語りが見れる。それは例えば、子供の高等教育機関選択の時のストーリーである。

F：「父親が総連系の（仕事をしているし）、大学は朝鮮大学あるのに、なんで子供らは行かせないんだ」って、すごい批難受けたのね。でも（私は）、「やりたいものがあるのに、そこにはないのに、どうして？」ってことで、すごい反発受けたけど、それだけは譲らなかった。「F d一人くらいは、朝鮮大学行きなさい」って言われたのね。「それだけは絶対ダメ、イヤだ！」ってということで、民族の組織の中の一員として、すごい批難されたけど、それだけ通した。

日本の大学に進学させるという選択は、本人はそのつもりでなくとも、在日同胞社会に背を向けたと取られてしまう傾向があった。それでもFさんは断行した。

F：（前略）ほかの人、「朝鮮人だからなんだかんだ」言って。じゃあ、同じことあなたたちもやってみなさいって、私はほんとに心で思ってる。

（略）

それだけ私、自分でやってきた自信があるから。ほかの勉強はしなくても。我が子に対しては、いろんな非難する人いるでしょ。ああでもない、こうでもないって。そういうの、いっぱい言われてきたから。その、同じ在日朝鮮人、総連系、同じ地域の人らに。言われてきたけど、「じゃあ、あなたたち、やって御覧なさい」って。私は、そういう強気で生きてないと崩れるから、とって。

Fさんの在日韓国・朝鮮人としての視座は、同胞社会を否定する方向にはなかった。しかし、在日韓国・朝鮮人集団の論理に絡めとられることには抵抗を示したのである。

集団の論理との競合は、子供の配偶者選択に関する語りにおいても見られる。Fさんには、「なるべくだったら、同じ国の人と結婚してほしいな」という思いはあったけれども、絶対的な必要条件とまではしなかった。子供の配偶者選択は基本的に「本人同士の問題」と捉えており、実際に子供が日本人の恋人と交際したとき、Fさんには当初の希望を修正する余地があった。

*：小さい頃、子供さんの時には、(同胞と結婚してほしいとか) そういうことを話して聞かせたりしたんですか？

F：いや、してないけども。やっぱり、自分の周りにはそういう人しかいなかったから。でも、お兄ちゃんの場合は、長男の場合はね、やっぱり仕事上、日本の人の中でやってるから、日本の女の子しか連れてこなかったから。仕方ないかなあ、いい子だったら、ま、いいかなって。一応、本人に任せる？

日本で生きる現実の生活の過程で、在日韓国・朝鮮人集団の従来論理に無批判に与するのではなく、状況に合わせて自らの論理を組み立てていった。とはいえ、在日韓国・朝鮮人の視点を放棄するのではない。在日韓国・朝鮮人「集団論理」からずれていきながらも、「在日韓国・朝鮮人の母」である彼女個人の生を構築するのである。

4. 考察

以上、一人の在日韓国・朝鮮人母Fさんの語りから、「仕事」(職業、出産)を重視する論理をもとに、娘の結婚をめぐる、彼女なりの「在日韓国・朝鮮人の母」を構築する過程を見てきた。女性の視点からは、男社会でも女同士の関係でも、女の「仕事」を読み替えてこれを娘が積極的に果たすことにより自分とは同じ轍を踏まないよう方向づけ、自身も自らの人生を意味づけし直すさまがうかがえた。在日韓国・朝鮮人の視点からは、在日韓国・朝鮮人集団の論理に距離をとりつつ、在日韓国・朝鮮人である自己や子供の個人的な自己実現を追求する構えが浮かび上がった。

Fさんの場合、「オモニ」モデルから分岐する大きな転機となったのは、彼女自身の結婚であったように見える。娘のF dさんの現状は、仕事を続けまたF dさんの義母が彼女の仕事を喜んでいる点で、母Fさんの経験と正反対である。そのことに対してFさんは、「私がしてもらえなかったことしてもらって、いいなあ」と語った。娘の結婚を通してFさんが語ったのは、自分とは異なる人生を生きる娘の達成のストーリーとともに、自己の生の承認である。承認とは一つに、自分が娘に施した教育の正当性を確認すること。そしてもう一つは、同じ女性である娘の結婚を自身の結婚経験に重ね合わせて、自らの人生における欠如の埋め合わせを図ることである。

山田昌弘によれば、結婚の意味には男女差がある。男性にとって結婚は、人生

のコースに影響をもたらさない一つの「イベント」に過ぎないのに対し、女性にとっては、結婚相手によって自分の人生コースを修正する「生まれ変わり」の転機である、という [山田1996: 42-44]。Fさんは、結婚で「生まれ変わる」ことにより女が自律性を失う危険があることを、経験的に知る。そこでFさんは、Fdさんの人生の連続的な過程を慮り、生まれ変わる必要のない自分の仕事を持つだけの実力養成に力を入れた。これは、娘に「男のようであれ」と命じ、「男社会」に紛れ込んで男性の享受する利益に与らせようとしたということだろうか。否、「男の子は、(中略) 男の社会だからどんなふうにもやる」と考えるFさんの、Fdさんが女の子であるがゆえに意識した方向づけであり、「男社会」の論理に揺さぶりをかける行為といえるだろう。

『娘の学校』[Duru=Bellat 1990=1993] を訳した中野知律は、次のように述べている。女子の教育機関利用における、「一見調和的に機能しているかのように見える再生産システムは、相反する方向を向いたベクトルの拮抗のうえに成り立っているものなのだ。……社会的性差の再生産システムの中を歩きながら、少女たちは (実はひそかに) その変革の可能性をあきらめていない」[中野1993]。娘の成長に関わる母親もまた、変革に無関心ではない。日本における高学歴化・専門職化は男性以上に女性の変化の程度が著しいが、その傾向は在日韓国・朝鮮人女性の場合も同様で、さらに顕著ですらある (図1~6)。男性を媒介にしてよりよく生まれ変わることも、女性自身がより主体的に人生を決めるという変革がすでに始まっており、それが在日韓国・朝鮮人女性にも広がっているものと思われる。

再生産に寄与する周囲の在日韓国・朝鮮人の母たちの流れに逆らうというのは、実はかなりの苦難を伴う選択だと思われる。ほかの同胞女性に同調しないという行為は、同時に、在日韓国・朝鮮人集団の論理との衝突でもある。その中で断行できたのは、彼女なりの論理の裏づけがあったからだろう。同胞社会あるいは「男社会」の論理の外側で、一人の「在日韓国・朝鮮人の母」として、日本社会に対峙したのである。Fさんを「オモニ」カテゴリーに閉じ込めて解釈することはできないのはもはや明らかであるが、同時に、Fさんを例外とすることもできない。在日韓国・朝鮮人および女性をとりまく状況が大きく変動する今日、行為者それぞれが既存のカテゴリーをはみ出す可能性を潜在させている。在日韓国・朝鮮人一人ひとりのすぐ傍に日本社会が迫りきており、在日韓国・朝鮮人集団の論理から外れかねない選択肢をつきつけられるという、今日の現実がある。Fさんの生活の論理は、そうした現実を踏まえた選択の積み重ねの結果得られたものであり、その論理が、彼女が行き着いた「在日韓国・朝鮮人の母」の位置における語りを生み出すのだろう。

5. おわりに

Fさんの語りを見ると、さまざまな社会的カテゴリーの論理に対する、彼女の鋭い洞察に気づかざるを得ない。Fさんは確かに、在日韓国・朝鮮人で母親である。しかし実際にはどのカテゴリーの役割をも演じ切ることなく、いくつもの側面を持つ個人として、状況を解釈し判断を下している。Fさんの生活過程においては、「オモニ」たちに割り振られる役割と、自分なりに母として最善だと考える方策とが相容れないことがあった。そうした葛藤をFさんはかなり強く意識しており、行為選択は結果的に取ったものである。

最後に触れておきたいのは、Fさんにとって、日本社会に対峙するのも決して楽だとは言えないことである。Fさんの現在の職場では、朝鮮人に関する日本人同僚の不快感な眼差しが感じられるため、民族的出自は上司しか知らないことになっている。「朝鮮人大好き」というFさんの言葉は、単に在日韓国・朝鮮人同胞への愛着を述べただけのものではなく、日本社会（筆者を含む）の圧力に向けても発された、自らの位置への承認を求める意思表示ともとれる。変革の矛先は、日本社会のエスニック関係の問題にも向けられている。

資料

図1 留学生以外の韓国・朝鮮籍学部学生数

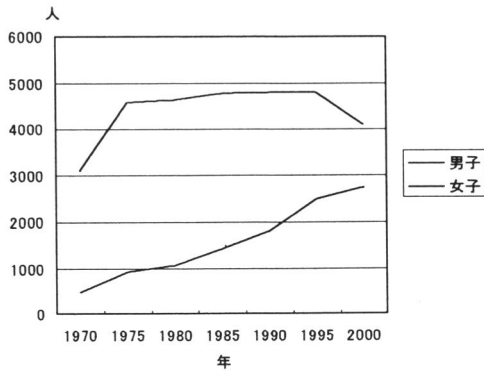


図2 全国学部学生数

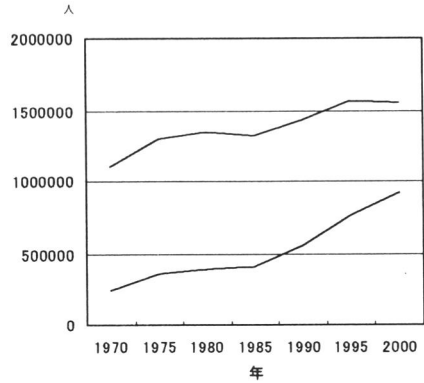


図3 職業別韓国・朝鮮籍者数(男性)

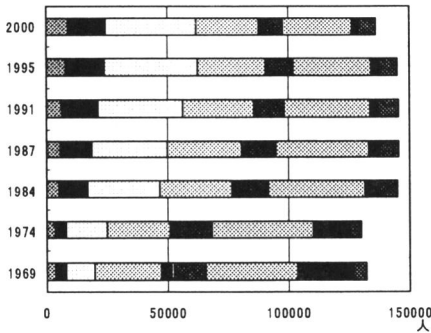


図4 全国就業者数(男性)

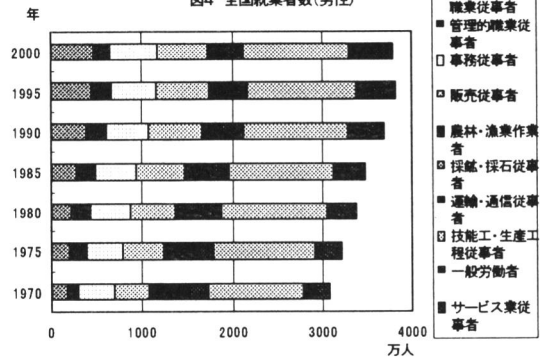


図5 職業別韓国・朝鮮籍者数(女性)

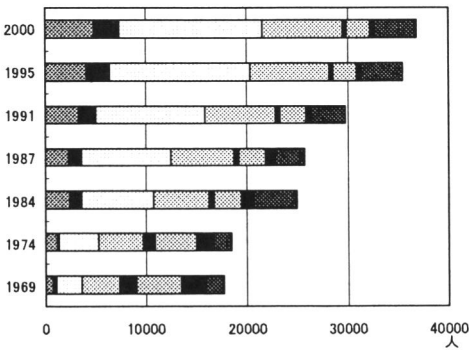
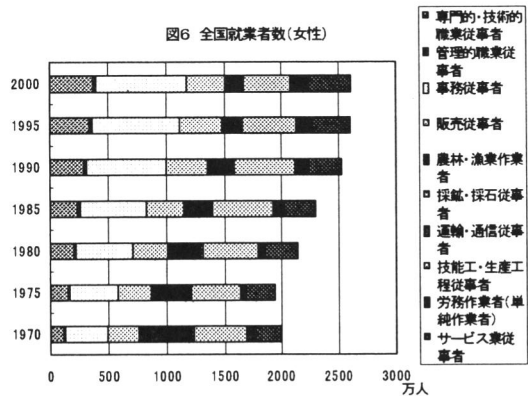


図6 全国就業者数(女性)



- 専門的・技術的職業従事者
- 管理的職業従事者
- 事務従事者
- 販売従事者
- 農林・漁業従事者
- 採鉱・採石従事者
- 運輸・通信従事者
- 技能工・生産工程従事者
- 一般労働者
- サービス従事者

出所 『学校基本調査報告書(高等教育機関)』(図1・2)、『在留外国人統計』(図3・5)、
『労働力調査年報』(図4・6。1970年・75年の全国就業者数は『労働力調査報告』
より) 各年版より筆者作成。

注

¹ 一方の筆者は、「娘さんの結婚について親の立場からの話を聞きたい」とやって来た、民族問題に関心のある大学院生で、娘と同年代の日本人女性、といった位置づけである。「在日韓国・朝鮮人である親の立場」を前提にしたことでの質問傾向の偏りは免れない。インタビューは、Fさんお住まいの地方都市で行い、筆者の友人の韓国人女子留学生在が同席した。

² 在日本朝鮮人総連合会。朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）を支持する在日朝鮮人の団体。主要な事業として、2万余人の学生を擁する体系的な民族教育機関を整備し、また、在日同胞の生活・企業活動の便を図っている。傘下団体30余、構成員は約20万人（1985年現在）[朴慶植 163-64]。

³ 桜井厚は、被差別部落に関する人びとを、個人としてでなく部落というカテゴリーを通して見る、「差別-被差別」という枠組みの問題を指摘する。「全体社会」に支配的なストーリーと、これに対抗的な部落のモデル・ストーリーは、被差別部落の現実やそこに暮らす人びとを「差別されている主体」と位置づけている点で、同じ地平にある[桜井 2002:262]。「オモニ」モデルにも、民族および性別による「差別-被差別」の枠組みが二重に埋め込まれていると思われる。決して、民族差別や性差別がないと主張するのではない。けれども、一人の在日韓国・朝鮮人女性の生を理解しようとするとき、こうしたモデルに回収して彼/彼女の被差別者としてのアイデンティティのみを強調することには、疑問がある。

⁴ 朝鮮大学校は、東京都小平市にある、総連傘下団体が運営する在日朝鮮人のための全寮制の高等教育機関。東京都の認可を受けているが、学校教育法上は学校ではなく「各種学校」の扱いである。

⁵ F dさんが就職後ほどなくして選んだ年上の在日韓国・朝鮮人男性に対しても、早すぎる婚期や年齢の開きを初めこそ問題にし、反対もしたが、相手やその親を見て適合性があると解釈し直すことで、Fさん自身もその結婚を是認するに至った。

⁶ 山田の指摘は、女性が「よりよく生まれ変われるような結婚でなければ、しないほうがまし」と考えるという、日本社会の未婚化・晩婚化傾向を説明するためのものである[山田 1996: 51]。結婚観の性差を固定化している点では、行為選択過程のリアリティを欠くように思われる。

⁷ 「在日韓国・朝鮮人の母」としては、これまで計3人に聞き取り調査に協力していただいた。日本人と結婚したKさん（58歳）の語りや論理が、いくつもの点でFさんと共通していたことはたいへん印象的であった。Kさんも、自らの経験に照らして、仕事と出産の両方を娘に奨励していた。

参考文献

- 鄭暎惠, 1993, 『『在日』とイエ制度』ほるもん文化編集委員会『在日朝鮮人・揺れる家族模様 ほるもん文化④』新幹社, 41-55.
- 江原由美子, 1995, 『装置としての性支配』勁草書房.
- 船橋恵子, 1992, 『『母性』概念の再検討』船橋恵子・堤マサエ『母性の社会学』サイエンス社, 3-61.
- 金賛汀, 1997, 『在日コリアン百年史』三五館.
- 中野知律, 1993, 「訳者解題」マリ・デュリュ＝ベラ『娘の学校——性差の社会的再生産』藤原書店, 350-57. (=1990, Marie Duru-Bellat, *L'École des filles: Quelle formation pour quels rôles sociaux?*, Éditions L'Harmattan.)
- 大東貢生, 2002, 「配偶者選択に見る民族関係——ジェンダーの視点」谷富夫編著『民

-
- 族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房, 596-619.
- 朴慶植, 1996, 「在日本朝鮮人総連合会」伊藤亜人ほか監修『朝鮮を知る事典』平凡社, 163-64.
- 朴和美, 2001, 「『怒ってくれてありがとう』——在日の女と男」『在日が差別する時される時 ほるもん文化⑨』新幹社, 11-32.
- Parsons, Talcott & Robert Bales, 1955;1956, *Family: Socialization and Interaction Process*, Free Press; Routledge & Kegan Paul. (=橋爪貞雄ほか訳, 2001, 『家族』黎明書房.)
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- ウリハッキョをつづる会, 2001, 『朝鮮学校ってどんなところ?』社会評論社.
- ウィリス, ポール (熊沢誠・山田潤訳), 1996, 『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房.
- 山田昌弘, 1996, 『結婚の社会学——未婚化・晩婚化は続くのか』丸善株式会社.

(新聞記事)

- 朝鮮新報, 2002.10.21, 「同胞結婚相談所 魏正・中央センター所長に聞く 民族結婚に取り組んで9年」.
- 民団新聞, 2002.10.16, 「伴侶探し一致協力で 大阪の民団, 婦人会, 青年会, 青商 コリアブライダルセンターを設立 27日に早速『集い』」.